

JAPANESE

なぜ創造主の存在を信じるべきなのか?

ウィリアム・ダラントは彼の著作「文明の話」のなかで言います。(第1巻99ページ)

「宗教がすべての人々にとっての教えとして君臨し続けるという昔からの信条は健全なものです。これは哲学者の意見では、歴史的、心理的な真実なのです。」

対照的に、今日いく人かの人たちは現代の人間が多大な知識や発展に到達したため、外部からの導きや指針、指導は既に不要で、周りの自然現象すべてを説明することができるかと主張します。

昔の人たちが崇拝行為を捧げることへ向かっていたのは、様々な物事の原因が分からなかったためであり、それを外部からの超常的な力と解釈し、崇拝し近づいたと主張します。



LAUNCHING  
**CURIOSITY**  
JUST SCAN IT!!



THIS IS  
**ISLAM**

THISISLAM.info

## やむことのない質問

実際のところ、人々を崇拜行為へと呼びかける別の理由があります。彼らが自然現象について無知だったということではありません。では、どうしてでしょうか？その背後には何があるのでしょうか？

人間は長い歴史を通して、存在の意味や理由、なぜここに我々はいのかと自問し続けました。死ねば塵となって散ることで終わるものとして理性的に納得できるものだろうか？そのあとに何も無いのだろうか？もし、そうであるならば人生の意味は？正誤、善悪を判断する基準は何なのか？例えば、正直であることが嘘よりも徳が高いのはなぜなのか？

これらの問いと同種のもは人間の理性に繰り返し訴え続け、その問いから逃れ解放されるために、素早く抵抗し欺いてきたのです。ついには著名な無神論哲学者のショーペンハウアーは人間を「形而上学的動物」と定義するまでにいたります。これは人間のもっとも特徴的な性質の一つであるものの、存在の意味に関する問いを解決するものではありません。人間の天性と理性は、天に問いかけます。

なぜ存在しているのか？その後何かが待ち受けているのかと？

先進的な生産物やツールを有する現代文明は、存在の意味や目的、真実に向き合う代わりに、残念ながら、存在の意味についての問いから新技術や兵器、力でいかに支配するか、あるいは、新しく考案された革新的な遊び方、楽しみ方で、どれだけ可能な限りの快楽を味わうことができるかという問いに逃げるのです。しかし、その問いは、機会がある度に頭の中で新たに浮かび上がってくるものなのです。

ギリシャの著述家プラタルコスは言いました：

囲壁、王様、文明、劇場のない町を私たちは見つけるかもしれない。しかし人の暮らす町として、礼拝堂や崇拜者たちのない町は見つけることができない。

Plutarch, s Morals, ed. William W. Goodwin (Boston: Little, Brown, & Co., 1883)

## ムスリムの信仰におけるアッラー：

アッラーという言葉は、ムスリムたちにとって創造主、すべての所有者、あらゆる物事の管理者を意味する言葉です。アラビア語の原義では、心と理性と身体が崇拜、愛情、服従、畏れ、希望を向ける崇拜対象を意味します。

ムスリムたちによれば、アッラーには99以上の御名があります。それらは最も良い御名の数々で、偉大な意味や内容を持つものです。完全無欠さ、御力、権威、慈悲などを示します。そのいくつかをみてみましょう：

- 無が先行することなく、そのあとに消滅することも無い完全な生が彼にあるということ。かれの名前のなかには、最初の御方、最後の御方というのがある。
- かれこそは全宇宙、すべての被造物の創造者であり、無からそれらを創り出した。そして所有者、管理者である。超常現象のみではなく、私たちが学び発見することで理解可能な自然の摂理に基づいて運営されているお方。
- 最小の微生物から、巨大な天体に至るまで完璧に創造し、そのなかでそれらが適切に活動できるように配慮されたお方。

- 僕たちすべてに慈悲深い御方。かれの慈悲は怒りに先行する。かれの慈悲のひとつに、人々を教え導くために使徒たちを遣わしたこと、啓典を下したことが挙げられる。

- かれは私たちをこの現世に創造し理性、知性、感覚を与えた。私たちの行い、意図、動向を、人生のなかで起きるさまざまな出来事、安楽や苦難を通して試みられる。人々が相応しい形で復活の日に報いられるために。

- 唯一で同位者のない御方。かれ御自身に比肩するものもその属性や御力、崇拜されるに相応しいことにおいて同じ存在のないお方。すべての欠陥から無縁であり、配偶者や子供、それに類する何者とも無縁である。

クルアーンは、アッラーとその御名、属性、それが人々の生活にあてる影響などについて多くを語りました。そして人の理性や心はアッラーに向かうことを余儀なくされており、どれだけ拒絶を試みてたとしても、弱っている時や熟考の際に感じるものだと告げます。

一度は天へと思い慕う気持ちが湧きおこったことはありますか？

